

民俗風習

婚禮の風習について

— 坂ノ市町久土部落 —

富 来 満

「青年樽入れ」と言つて、当部落では現在尚続けられてい
る結婚式当夜の部落内青年団（若衆組）に依つて行われる祝
いのための行事がある。嫁の入家にあつては、取立てる程奇
異な風習も見られないが、三々九度の盃が終り会食にうつる
前、婿が退場したその時、座敷のツボ先か（えんさきのこと）「青年樽入れお祝い
申す」と元気の良い声をかける。これは若衆の自主的な婚礼披
露への申込みを意図して伝承されたものである。始めに特表
姿の若者が目録を持つて下座で二、三回礼をしては、おどけた
現で面白い（性教育的な）作法をする。それを仲人の前へ出す。
次は女装の青年がネーサンかむり、赤い腰巻を大きくのぞ
かせて、腰をふり／＼赤い高膳にノシをのせて仲人の前へ持つ
てくる。続いて女装の青年が、紙で作つた御魚一尾を運んでく
る。続いて、ホオカブリ、コシタをはきドテラを荒なわで
しめた若者が、股にはボールを二つ赤いきりで包んで、三十
糎ほどの長さによ／＼させながら、荒縄でしめた酒樽一荷

（ほんとうは中に入つていない）を手杵のにない棒にくくり
つけ、ドドイツ又は追分けを喰いながら酒によつたいで、
約二、三分間面白い表現をしながら酒樽を納める。すると仲
人がその場で、「めでたく受納致しました。」とお礼の言葉を
言う。次はツボの方から、「お家繁昌入り舟」と力強い声か
かゝる。樽入れの行事ではこれが見物で、部落の觀衆も息を
のんで見入る程である。長さ約四〇糎、高さ約一二糎、幅約一
〇糎ほどの木製の船に、七福神に結ばれた小蕪二つ（又は二股
大根）米俵（茶づつ）程の小さなモケイ、四俵、その他季節の野
菜を積んでその船をつなで引いてくる。船の帆には「夫婦仲
吉丸」と墨で書かれ、二股大根、赤い人參に七福神を関連さ
せてある点などは、縁結びと夫婦の和合を示す象徴として、
意味の深いものであろう。ねじ鉢巻ぎに、ハツピ腰みのをつ
けた漁師姿の青年が、アシナカ（わらぞうり）をはいて「ハ
ンニヤ、ハンニヤ、メデタイ、ハンニヤ」と半分は船を引い
て出て来る。半分を引きおわると、海岸についたことを意味
するのであろう、綱をたぐつて船を押しはじめ。腰を左右
に尻をまわし、「エーイトハンニヤ」と調子よい掛声で押す
と、一般の若衆も次の部屋からそれに答え合わせる様な声
で、「オモイゾオモイゾ、エーイトハンニヤ」と掛声をかけ
る。船は花嫁の膝の前まで押され、その前で漁師姿の若者が
両手について、花嫁の顔をのぞき込んで、につこり笑うと
言う様にしばらくふざけた表現をする。その姿を俯向いたま

とちらつと見た花嫁は顔を赤くせめて、二度と頭を上げられない程であり、観衆も座敷のえんさきから見ている、くすくすと笑わないではおれないのである。そのしづきが終ると、船を仲人の前におさめて若者はおもむろにさがる。下りかゝると同時に座敷のツボの方から「東西東西」と声がかゝり、花嫁をほめる言葉が申し述べられる。これは若衆と話し合ひで決められた部落の年よりがする事になつており、蛇の目傘を開き傘で顔を半分かくして、調子よく「ほめ言葉」を述べる。

東西東西東州東和浦（ふざけた）の物語、裏も表もお座敷もしばしが間お静かに、ヤツチャ東西ご免なれ。私しや築紫七八端、磯端（いそばん）あたり、上江のほりて下りかけ、唐と日本の潮界、男波女波にや誘われて、王の瀬川に舟をつけ、九六位山に参りて帰りがけ、大道小道に踏み迷い、御門（みかど）下通りかゝれば、銚子、盃、皿や茶碗の音がする。立寄り見ればご婚礼、有志歴史のお寄り合ひ、やつちやこれじやなるまい。所作法は知らねども、お家の作りをほめたなら、一階二階三階作りの八つ棟で上は椀皮（わんかわ）で葺き流し、建てた柱は金と銀との巻柱、下にや綾や錦を敷き渡し、お座にや燭台や品大ぼうを盛りこぼし、床にや蓬来山や七福神のかけもので、なげし（投げ掛止）にかけしその槍を使う婿さんにつれそい来る嫁さんを、少々ばかりほめやしよ。何にたと

婚礼の風習について

えてほめようかな、山にたとえてほめようかな、川にたとえてほめようかな、舟にたとえてほめたなら、

- 一つ 奥州日の出舟
- 二つ 夫婦の縁の舟
- 三つ 見事な飾り舟
- 四つ 夜な夜なやどり舟
- 五つ 出雲の神さんが結び合わせた縁の舟
- 六つ 婿さん新造舟
- 七つ 難波（なんば）の衣裳舟
- 八つ 八州のはしり舟
- 九つ こゝに來た舟は
- 十でとうとう坐り舟

天の河原に降る雨も、七夕さんの恋の邪魔、お若い衆の色話、婿さんかえれば、邪魔と邪魔。まあだまあだほめたき事は山じや木の数萱（かずか）の数、三千世界の星の数、千里磯辺の砂の数、八万地獄の鬼の数ほどあるなれど、私しやはるばる汐ざかり、汐が満て来る行てみましよう。又のごえんにやほめやしよ。そこ失敬。」

これに続いて仲人の方から「ほめ返し」がある。

東西東西たゞ今おほめ下されしおん方は、どのどなたか知らねども、チンチクリユウや紅竹や、七竹（しちちく）や八竹（はちちく）の末までも、杖にも笛にも、尺八にも、よう鳴りやしやんしたこ

とわいな。千鳥、燗鍋燗かけて、ごひいきの程は、ちよいとごないしよまで、ごないしよまで。

引続いて家の主人又は婿は、本家のナイシヨに案内して酒宴を開くわけである。然し場所的にこまるので、古くから隣家が若衆の控所になつており、こゝで樽入れの酒を飲みかわす風習になつており、現在も続けられている。然もこの樽入れ行事は、長男の嫁とりの場合にだけ行われているが、近頃では、大分改められて、二男、三男の嫁とり、長女の養子とりの場合にも行われている。それは、樽入れとは言うものの、当家が全部の酒を購入し提供する訳で、経済的に恵まれない家にあつては、この行事はしない様である。樽入れにあたつて、婿方が部落の青年団長に、期日時間を申し込み、右の行事をおこなうが、二男の嫁とりにも、長女の養子とりにも、盛大に行われているのは、そのような理由に基くものである。そしてこの風習を伝承するために若衆も、古老も、タノモシ講や仕事のうち上げの酒の座では、これを話しているようである。

県内では、今ほとんど見られないと思うが、若者組との結びつきが、何かの形で残つていふと言ふ事は考えられる。結婚簡素化が叫ばれている反面、この行事が盛大に行われているのは、古来若者組（青年団）の団結を示す伝承となつた風習であろう。大野郡白山村の「松入れ」津久見市保戸島の

「青年宿」などの学的な分析については、大分大学半田先生が先に紹介されているので、樽入れ行事のようすのみを資料として紹介する。

（佐賀関小学校教官）

佐伯文庫の行方

増 村 隆 也

佐伯文庫は江戸時代学者三大名の一であつた佐伯藩の八代毛利高標（タカスエ）公が、二万石の財力を傾けてまで蒐集した八万本で、非常に有名である。その内二万冊は十代高翰（タカナカ）の代に幕府に献上し残り六万冊は行方不明である。これに関しては小著佐伯藩史に詳しく述べておいた。

明治維新になつてから或は四散した、否藩の経営していた魚市場の倉庫においてあつたものを、三の丸の城門の楼上と、旧藩邸であつた今の池彦の倉庫にしまつてある等と云われている。私の佐伯で見たのは佐伯久成等に蔵する明版法華経だけで、佐伯小学校にある後漢書は四教堂の印だけで佐伯文庫印はない。

九大の山室三良氏は図書館学オ一号に毛利高標の愛書精神と題して佐伯探書行の記事の中で「郷土史家に尋ねると三の丸楼門上及び科亭池彦（旧毛利邸）の倉庫に家老日記に混つ